

去る4月24日、僕にとつて大きなニュースが報じられました。『認知症の徘徊で鉄道事故。91歳の妻に賠償命令』*。

僕だけでなく、この業界にかかわる人なら誰もが関心をもったニュースだったと思います。2007年の事故をめぐる訴訟の二審判決が下されたのです。

判決に改めて思う 現場の役割

一報を聞き、「この判決で一般人は『もう認知症の人は外に出てはダメだ』『認知症の人が地域で暮らすのは危険。施設が安心だ』と思わないだろうか？ 一生懸命介護していたはずの妻に、なぜ賠償命令なのか？」などと不安が頭をよぎりました。

一方で、「事故にあつた人が認知症でなかったら、このような裁判になつたのだろうか？ 大きなニュースになつたのだろうか？」とも考えました。一般的には、事故の原因となつてしまった人の遺族は、鉄道会社に対し、振替輸送や人件費等の損害に応じた費用を支払つて和解するものと理解していたからです。

認知症の人が 最期まで「生ききる」暮らしの支え方 +11+

認知症になっても、 自由に暮らせる 地域へ

鉄道事故裁判の行方と筆者の忘れられない出来事から
改めて私たち介護職の役割を見つめます。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

思うところは多くありましたが、僕は評論家ではなく、実践者です。

この事故、判決に対し、どちらが良い悪いと評価するのではなく、今後自分の身近なところで同じような悲劇が起こらないよう何ができるのかを考え、行動を起こすことが役割だと改めて考えています。

忘れられない出来事

僕は介護の仕事について19年になりますが、そのなかで決して忘れられない出来事として、村尾キクエさん(仮名)のことがあります。

キクエさんは、当時85歳だったと思います。デイサービスの行事で皆とそめん流しに出かけ



た日、キクエさんはお元気で、年に1度のイベントを喜び、そうめんを美味しそうに食べていました。ただ、その1か月前ほどから、「鞆がない」と、デイサービスに来る度に探す様子が見られ、僕はそれが少し気になっていました。

それから1週間後の朝のことです。いつも通りデイのお迎えに行くと、キクエさんが出てきません。「おかしいなあ、どこかに出かけているのかなあ」。

キクエさんのご自宅はいつも施錠されておらず、その日も玄関の鍵はかかかっていませんでした。何度呼んでも応答がなく、僕は「失礼します」と大きな声をかけ家に入りました。しかし、どの部屋にも、トイレやお風呂にも、キクエさんはいません。外に出て、もう一度庭や隣の畑も見渡しま

*認知症の鉄道事故：2007年に愛知県で認知症の男性(当時91)が電車にはねられ死亡した事故。JR東海が男性遺族に損害賠償を求め、昨年の一審判決は介護にかかわった妻と長男に、請求通り720万円の支払いを命じた。今年4月の名古屋高裁控訴審判決では、JRが駅で十分に監視していれば事故を防止できる可能性があったことも指摘し、賠償責任を5割にとどめ、妻(91)のみに約360万円の支払いを命じている。

認知症の人が最期まで「生ききる」暮らしの支え方

図 HITOCOCOとは

広範囲な飛距離で捜索時間の短縮を実現した「位置情報発信機」

発信機までの距離と方向を表示。携帯する人間を探すことができる



したがやはり見当たりにません。いつも外出のとき使っている押し車もなく、僕は友達の家や買い物にでも行つたのだろうと、一度引き揚げました。

いなくなった
キクエさん

1時間後。気になって再び訪問しましたが、状況はまったく変化がありませんでした。これはおかしいと、職場の仲間や役場にも連絡をしました。役場の職員が「家族や警察、消防団にも連絡をと

り、行方不明ということで一斉捜索が始まりました。

100人以上が集まり、手分けして探し回つたと思います。しかし、数時間経つても手がかりすら掴めません。捜索開始から3日が経ち、1週間が経ち、次第に捜索体制の規模は小さくなりま

した。そして10日後、ご家族の了解を得て、警察や消防団の捜索はいったん打ち切られました。「キクエさんはまだ見つかつていないじゃないか」。そんな思いでしたが、聞き入れてはもらえませんでした。

変わり果てた姿

その後も、僕たちは仕事の合間や終業後に、ご家族と心当たりの場所を何度も探し回りましたが、やはり見つかりません。

「キクエさん、一体どこに行つてしまったのだろう。今、何をしたらつしやるのだろう」。気にならない日はありませんでした。

3か月が過ぎたある日、警察から連絡がありました。キクエさんが見つかったのです。キクエさんは、自宅から300mほどの

線路脇の草むらで亡くなっていました。死後3か月が経ち、身体の一部が腐敗し、一部は白骨化していました。キクエさんがキクエさんでないようで、「本当に長い時間を苦しく、寂しい思いで過ごされたのだろうか……」と思いました。

隣に倒れていた押し車には、壁掛け時計が乗っていました。警察の人の推測では、時計を修理に持つて行くこうと出かけたものの、道がわからなくなり草むらに入り込んで、転んで動けなくなつたのでは、とのことでした。

こんなにご自宅から近かつたのになぜ見つからなかったのか——。僕にとって忘れられない、また忘れてはならない出来事です。

僕たちができること
「徘徊」と呼ばれなくなる地域づくり

現在、僕の活動する霧島市では、地域密着型サービス事業者連合会で、「認知症になつても安心して暮らし続けられる地域を目指し、さまざまな活動をしています。

徘徊模擬訓練や認知症サポートー養成講座の開催等のほか、最近、取り組み始めたのが「HITOCOCO(ヒトココ)」という位置情報発信機を活用した見守りネットワークです(図)。

こういった機器の使用は本人の自由を奪うことになるのではないかと僕たちは悩みました。しかし、キクエさんのように悲しく悔いが残る最期を繰り返さないように、「自由な暮らしを抑制するのでなく、逆に自由に地域でその人らしく暮らし続けていただくために」と始まつたのです。

「HITOCOCO」の特徴は軽くて電池が長持ちし、広範囲を効果的に捜索できることです。使用目的を誤らないよう行政、地域包括支援センター、警察、家族、本人、ライフサポートワーカーで地域ケア会議を必ず開催し、皆で使用目的を確認して活用しています。

まだ始まつたばかりですが、コツコツと仲間と共に実践を重ねていきたいと思つています。その積み重ねで、認知症の人が安心して身近な地域を徘徊できるようになれば、それは「徘徊」とは呼ばれなくなるのでしょうか。